

夏休みを中心にみた女子大学生の生活時間の型について

岩田 浩子

Time Usage Patterns of Female College Students during Summer

Hiroko IWATA

Abstract

This study attempts to clarify the patterns of time-use for the college life of female students around the summer vacation. The sample employed in this study was the time-study data on 328 days that were returned from 164 female university students who chose two days and recorded their time-use of twenty-four hours for each day. First, the cluster analysis was applied to the data. Except the basic time-use for living, such as sleeping and eating, twenty-one items of the time-use for the general living behavior were classified into five clusters. Each cluster was named "working," "studying," "social behavior," "home-life," and "spare time," respectively. Second, this study employed the 'quantification method of the third type' to classify the categorized time-use of these five clusters. With the application of this method to the grouping of the samples of the time-use for 328 days, the samples were divided into four types. Each type of the time-use was characterized as follows: the 'Type I'—long working, the 'Type II'—a little studying and fairly long home-life, the 'Type III'—a proper amount of studying and social behavior, and the 'Type IV'—moderate working and long studying.

緒 言

『モラトリアム人間』とも呼ばれることのある現代の大学生の生活は、豊かな自由時間に恵まれ、勉強を忘れて青春を謳歌することのみ費やされているようにも見え、あるいはまた勉強そっちのけでアルバイトに励んでいるかのようでもあって、とかく『現代の若者は云々』と批判の矢面に立たされがちである。しかし実際のところは不明で、勤労者や家庭の主婦の生活行動や生活時間がそれぞれ労働科学³⁾や家政学⁴⁾の分野で詳しく検討されてきたのに対し、大学生の生活行動に対しては研究や調査の立場からの強い関心は払われてこなかった。このことの要因としては勤労者でもなく、主婦でもない大学生は労働科学や家政学の研究対象とはなりにくかったことが考えられる。しかし、それとは別に、勤労者や主婦の生活のように一定のパターンがあるのとは異なり、多様性に富むと想像される学生生活の実態を明らかにするためには生活時間研究の方法に限界があったことも考えられる。そこで本研究では女子大学生を対象に、その生活行動が最も多様になる時期のひとつと考えられる夏休みとその前後の時期について生活行動と生活時間がどのように構成されているか、数量化法を中心とする多変量解析の方

法を用いてその実態を解明することを試みた。

対象と方法

調査対象は東京都内O女子大学(家政学部1～3年生33名)、神奈川県内S女子大学(学芸学部1年生43名、2～3年生7名)、および本学(家政学部2～3年生81名)の合計164名の女子大学学生である。調査年度はO女子大学は1991年および92年、S女子大学は1991年、本学は1992年と93年である。大学によって夏休みの時期はやや異なるが、何れの大学でも夏休みを中心とする6月～9月の時期に、その中から被調査者が任意に選んだ2日についてそれぞれ1日の生活行動を生活時間調査票に各自が記録する方法をとった。したがって、164名の2日分の生活時間記録からなる328例の1日生活時間資料が得られた。用いた調査票には午前0時から24時までの24時間について5分ごとの目盛りが記してあり、分単位の行動記録も可能であるが、調査票には各自が1日の行動の後で記入したものが多かったので5分単位に記録されたものが多かった。

調査資料の分析にあたり、まず、記録された生活行動項目すべてをもれなく取り上げるためにNHKの国民生活時間調査²⁾の生活行動分類表を参考にして中分類と小分類の項目に該当する項目を取り上げ、28項目からなる項目別生活時間集計表を作成した。時間の集計に関しては回収された生活時間調査票の大多数の記録が5分単位になっていることから5分を基本単位にして集計を行った。同一時間帯に2つの行動がある場合の優先順位は女子大学生の『ながら族』の実態を考慮し、(1)目的とする行動、(2)身体活動が関与している行動、(3)より大きい注意が向けられている行動、の順に優先順位をつけた。たとえば、「ウォークマンで音楽を聴きながら自宅からアルバイト先へ向かって歩く」は「通勤」として、「(洗濯機で)洗濯をしながら朝食の準備をする」は「炊事」、「(家にいて)ラジオで音楽を聞きながらレポートを書く」は「学外学習」としてとりあげた。

資料の統計的処理にはNEC PC-9801 BX3 および統計解析ソフト HALBAU-4を用い、クラスター分析と数量化3類の方法を適用して生活時間の分析を行った。

結 果

1. 生活行動項目の分類

表1は項目別生活時間集計表に取り上げた28の生活行動項目とその生起頻度を示したものである。表1上方のA欄の3項目、「睡眠」、「食事」、「身の回り」は全事例に生起していた項目であり、学生生活には誰にとっても必要な行動であると考えられるので以後、「生活必需行動」と呼ぶことにする。B欄の4番から23番の行動項目は全事例に生起していたわけではないが、5%以上の事例に生起が認められたものであり、大多数の行動項目がこのBに属していた。また、C欄の5項目「家庭雑事」、「映画」、「手紙」、「日記」、「遊び」は何れも生起率が5%未満の行動である。これらの行動は稀なものと見ることが出来るので以後、この5項目をひとまとめにして「その他」という項目に入れることにする。そして、この「その他」とB欄の20の行動項目をあわせた21の項目を女子大学生の「一般的生活行動項目」と呼ぶことにしたい。

図1はこの「一般的生活行動項目」の項目別生活時間にクラスター分析を適用して分析した結果を樹形図に表したものである。この樹形図の距離は群平均法によっている。図中に示したように、距離1.42のところでは21の一般的生活行動項目は5つのクラスターに分類できた。図の上から順に見ると「仕事」と「通勤」がひとつのクラスターを作っているもので、これ

表1 行動項目別生活行動の生起率と行動の生起した事例における1日生活時間

	行動項目	生起率 事例数 率 (%)	時間 (分) 平均値 (SD)	備考 (行動項目の内容, 主な例等)	
A	1 睡眠	328 (100.0)	466.1 (96.9)	30分以上継続したもの	
	2 食事	328 (100.0)	79.0 (30.6)	朝・昼・夕食, ブランチ, 夜食	
	3 身の回り	328 (100.0)	86.8 (31.2)	洗顔, トイレ, 入浴, 洗髪, 身支度, 身辺整理	
B	4 テレビ	266 (81.1)	118.4 (85.8)	テレビを見る	
	5 休息	240 (73.2)	58.1 (45.4)	休憩, 無為, 昼寝 (30分未満), お茶, おやつ	
	6 移動	227 (69.2)	96.5 (77.2)	通勤, 通学以外の移動 (旅行中の移動, 車の運転を含む)	
	7 炊事	172 (52.4)	48.3 (38.7)	食事やおやつ, お茶の準備や後始末	
	8 学外学習	170 (51.8)	137.1 (94.7)	自宅学習, 学外図書館, 英会話学校	
	9 会話・電話	165 (50.3)	73.6 (61.5)	直接または電話による会話, おしゃべり	
	10 通学	165 (50.3)	102.2 (64.5)	大学-自宅間の移動	
	11 授業	165 (50.3)	229.8 (96.5)	大学での学習活動	
	12 仕事	114 (34.8)	329.1 (147.9)	収入を得る行動 (家庭教師, 在宅労働を含むアルバイト)	
	13 通勤	110 (33.5)	56.5 (41.8)	仕事の場-自宅間の移動	
	14 読書	102 (31.1)	81.6 (75.1)	本 (雑誌, 漫画を除く) を読む	
	15 掃除	96 (29.3)	42.3 (36.5)	自宅における掃除 (ごみ処理, 草取りを含む)	
	16 散歩	91 (27.7)	135.4 (103.2)	犬の散歩, ウインドウショッピング, 旅行中の散策	
	17 買い物	87 (26.5)	30.8 (18.8)	食料品, 日用品等の生活用品の買い物	
	18 洗濯	86 (26.2)	37.3 (31.2)	アイロンかけ, 整理, 収納を含む	
	19 新聞・雑誌	61 (18.6)	36.8 (25.8)	新聞や雑誌 (漫画を含む) を読む	
	20 スポーツ	54 (16.5)	117.7 (91.1)	運動 (速歩, ジョギングを含む), スポーツ活動	
	21 趣味・稽古	39 (11.9)	122.4 (100.7)	技能や資格の勉強を含む	
	22 音楽鑑賞	29 (8.8)	55.3 (31.1)	コンサート, ラジオ, CD, テープで聴く (移動時を除く)	
	23 クラブ活動	25 (7.6)	276.8 (136.9)	サークル, 同好会等における活動	
	C	24 家庭雑事	12 (3.7)	38.3 (32.1)	雑用, 片づけ, 手伝い等
		25 映画	12 (3.7)	117.5 (50.8)	映画館で見るものに限る
		26 手紙	11 (3.4)	51.4 (30.5)	手紙を書く
27 日記		7 (2.1)	30.7 (15.5)	日記を書く	
28 遊び		3 (0.9)	126.7 (20.5)	子どもと遊ぶ, ゲームをする	

を『労働』のクラスターと呼ぶことにする。次に、「授業」と「通学」および「学外学習」の3項目がひとつのクラスターを作っているの、これは『勉学』のクラスターと呼ぶことにしたい。その下は「スポーツ」、「移動」、「散歩」および「会話・電話」の4つがクラスターをつくっているが、このクラスターはスポーツや散歩のような身体活動と通勤・通学以外の移動の

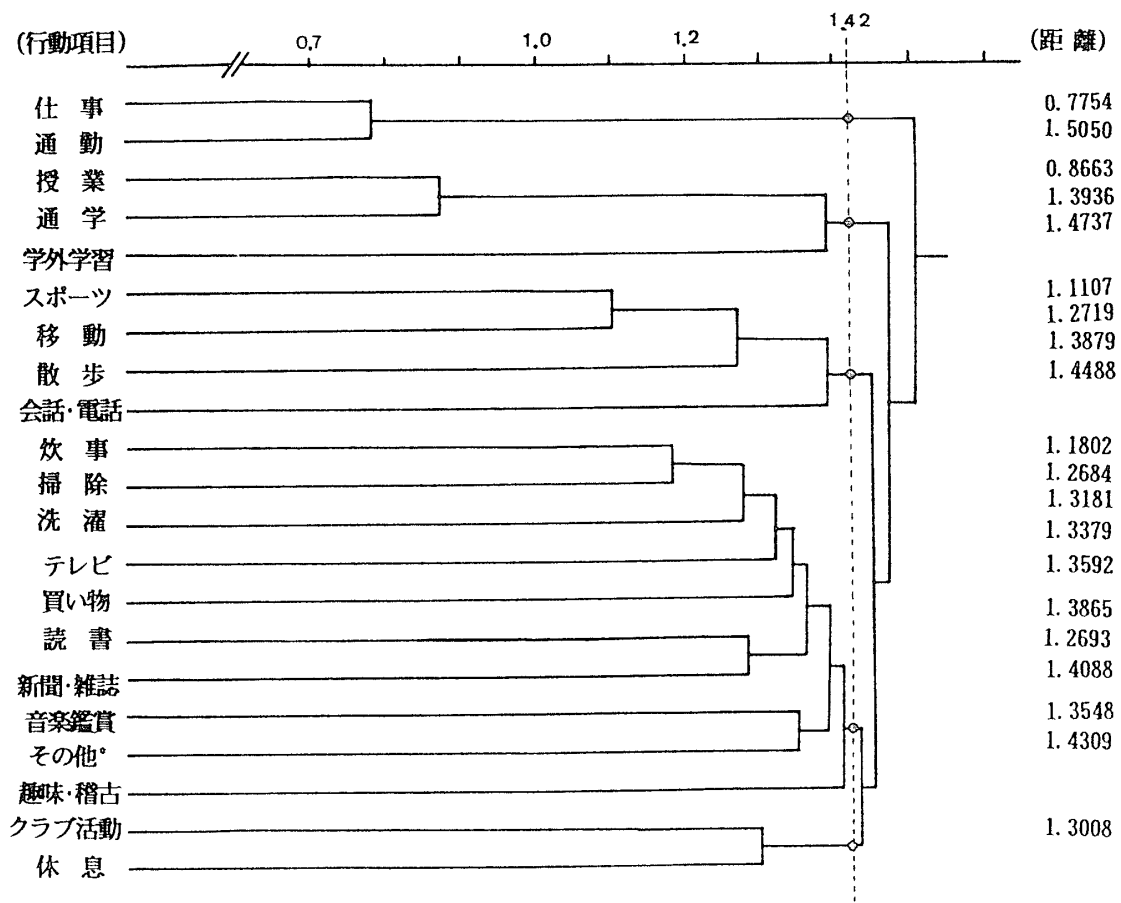


図1 1日生活時間の樹形図(群平均法): 図中の「その他*」は表1 C欄の5項をまとめたもの

ような場所を移す行動、および、会話や電話のようなコミュニケーションの行動からなるので、このクラスターは社会的な意味を持つ行動で出来ていると考えられる。そこでこのクラスターは『社会』と名付けることにする。『社会』のクラスターの下には10の行動項目からなるクラスターが形成されているが、このクラスターには家庭における行動が集まっており、「その他」という1項目にまとめられている5項目の行動でも映画館で映画を見る行動を除くと残りの4項目は在宅時の行動と見なせるので、このクラスターには『家庭』という名称を与えてよいであろう。一番下のクラスターは「クラブ活動」と「休息」から成り立っている。大学のサークルや同好会で活動するという活発な行動と「休息」という身体を休める行動がひとつのクラスターを形成しているのは不思議な感じもするが、しかし、クラブ活動というのは大学生活における余暇活動であり、休息というのもその多くは余暇時間に行われるという点を考えてみれば、「クラブ活動」も「休息」も積極的か消極的かの違いはあっても余暇を活用する点は共通しているのでこのクラスターの名称は『余暇』が適しているであろう。以上のようにして、女子大学生の生活行動のうち生活必需行動を除く21の行動項目を分類すると『労働』、『勉学』、『社会』、『家庭』、『余暇』の5つにまとめられることが分かった。

2. 生活行動の型

『労働』、『勉学』、『社会』、『家庭』、『余暇』の各クラスターごとに生活時間を集計し、そのクラスター別生活時間を中央値を目安にほぼ二分して、数量データである生活時間を「長、短」

または{有, 無}のカテゴリーデータに変換した. このうち『労働』のクラスターについてはこの時間がゼロである事例が半数以上であったため{有, 無}と二分したが, 他の4つのクラスターについてはそれぞれの生活時間は中央値に出来るだけ近い値によってほぼ同数ずつ{長, 短}の2つに分けることが出来た. この「5クラスター×2カテゴリー」のカテゴリーデータに数量化3類の方法をあてはめ, カテゴリースコアとサンプルスコアを計算した. 表2はカテゴリースコアを示したものである. 固有値を見ると成分1の値がやや高いが, 成分1から成分3までの開きはあまり大きくなく, 累積寄与率は成分1から成分2までで51%, 成分3までで71%であるので女子大学生の生活時間は成分2までで50%程度, 成分3まで加えると70%まで分類されることが分かった.

表2の各カテゴリーの成分1をX軸に, 成分2をY軸, 成分3をZ軸にとってカテゴリースコアの散布の状態を示したものが図2である. はじめに図2左側のX-Y平面を見ると, X軸のプラスの側には『労働(有)』と『社会(短)』が, マイナスの側には『労働(無)』と『社会(長)』があるので, X軸(成分1の軸)は『労働』と『社会』のクラスターに属する生活時間の有無および長短を分ける軸と考えられる. また, 『労働(有)』と『社会(短)』が同じ側に, 『労働(無)』と『社会(長)』が同じ側にあることから, 『労働』と『社会』の生活時間の長さは相反した傾向にあることも分かる. 次にY軸に関してはプラスの側に『勉学(短)』と『家庭(長)』があり, それとは原点に関してほぼ対称な位置に『勉学(長)』と『家庭(短)』がある. したがって, Y軸(成分2の軸)は『勉学』と『家庭』の生活時間を分ける軸と考えられる. また, ここでも『勉学』と『家庭』の生活時間の長短は互いに反した傾向をもっていることが分かる. 次に, 図2右側のY-Z平面

表2 クラスター別1日生活時間に関するカテゴリースコア表

項目 — カテゴリー	成分 1	成分 2	成分 3	
労働	なし	-1.140	-0.348	-0.487
	あり	2.111	0.645	0.901
勉学	短い	-0.238	1.548	0.500
	長い	0.241	-1.567	-0.506
社会	短い	1.259	0.731	-0.574
	長い	-1.229	-0.713	0.560
家庭	短い	0.947	-1.351	0.415
	長い	-0.947	1.351	-0.415
余暇	短い	-0.303	-0.064	1.941
	長い	0.307	0.065	-1.965
固有値	0.274	0.236	0.203	
寄与率(%)	27.43	23.59	20.32	
累積寄与率(%)	27.43	51.02	71.34	

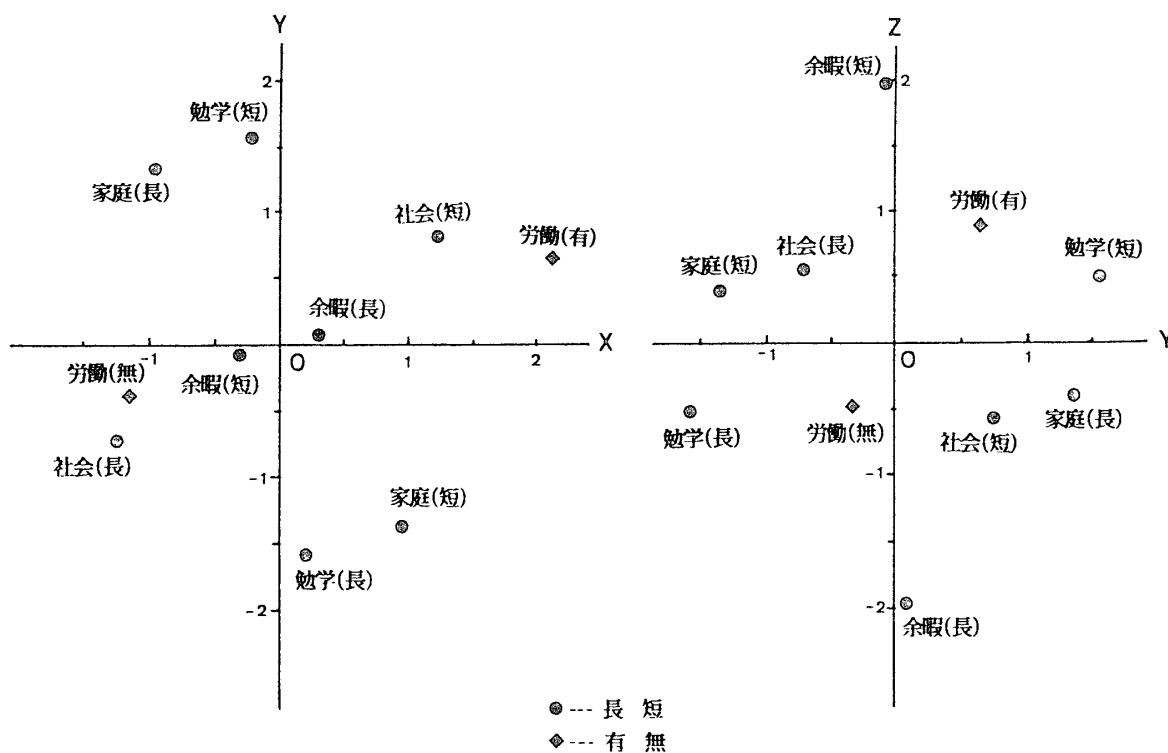


図2 カテゴリースコアグラフ

を見ると、Z軸に近いプラスの側には『余暇(短)』が、マイナスの側には『余暇(長)』が分布しているのでZ軸(成分3の軸)は『余暇』のクラスターの時間の長短を分ける軸になっていると見てよいであろう。したがって、『余暇』の長短という点を無視すれば、女子大学生の生活行動における4つのクラスターは成分1と成分2の値の符号で分類されると考えられる。

表3 生活時間の4つの型: サンプルスコアの符号による分類

型	Type I	Type II	Type III	Type IV
1 軸	0, +	-	-	0, +
2 軸	0, +	0, +	-	-
事例数	68	110	90	60

そこで各事例が得た得点(サンプルスコア)の1軸と2軸のスコアの符号によって328の事例の分類を試みたものが表3である。型別の事例数はType Iが68, Type IVが60でほぼ等しく, Type IIとType IIIの事例数はやや多く, それぞれ110例と90例あった。

3. 型別に見た生活時間

表4は生活必需行動に属する3つの行動項目と, 一般的生活行動項目の5つのクラスターに属する21項目の生活行動それぞれの時間の平均値と標準偏差をType IからType IVまでの4つの型に分けて示したものである。数値だけでは各型の生活時間の特徴をつかみにくいので図3

表4 型別にみた行動項目別1日生活時間の平均値と標準偏差

型 事 例 数		Type I 68	Type II 110	Type III 90	Type IV 60	全 体 328
分 類	行動項目	平均値(SD)	平均値(SD)	平均値(SD)	平均値(SD)	平均値(SD)
生活必需行動	睡 眠	460(87)	510(102)	444(91)	426(74)	466(97)
	食 事	73(28)	87(35)	81(31)	69(18)	79(31)
	身の回り	82(27)	82(33)	96(30)	88(31)	88(31)
労 働	仕 事	388(158)	13(50)	0(0)	161(132)	114(179)
	通 勤	60(50)	3(10)	0(0)	31(31)	19(36)
勉 学	授 業	27(73)	60(106)	169(138)	238(93)	116(134)
	通 学	11(32)	29(62)	63(59)	119(69)	51(69)
	学外学習	43(61)	84(103)	63(96)	91(109)	71(97)
社 会	ス ポ ー ツ	8(31)	14(53)	45(82)	3(15)	19(57)
	移 動	23(49)	48(56)	144(83)	34(39)	67(78)
	散 歩	8(30)	49(89)	67(104)	6(30)	38(81)
	会話・電話	18(32)	32(55)	65(74)	25(32)	37(57)
家 庭	炊 事	21(29)	46(47)	14(24)	8(17)	25(37)
	掃 除	12(29)	22(36)	8(17)	1(6)	12(28)
	洗 濯	9(18)	16(30)	7(14)	4(21)	10(23)
	テ レ ビ	76(66)	159(103)	61(66)	56(47)	96(90)
	買 い 物	6(15)	12(20)	8(17)	4(8)	8(17)
	読 書	21(38)	52(83)	8(19)	8(19)	25(56)
	新聞・雑誌	4(11)	11(24)	7(17)	3(9)	7(18)
	音楽鑑賞	2(10)	12(29)	1(6)	1(4)	5(18)
	その他*	8(27)	12(31)	13(40)	0(0)	9(30)
	趣味・稽古	9(31)	32(81)	6(26)	2(15)	15(53)
余 暇	クラブ活動	15(90)	14(66)	37(97)	18(74)	21(83)
	休 息	54(53)	41(48)	34(40)	45(43)	43(47)

(単位：分)

には各型の1日生活時間を生活必需行動と5つのクラスターに分けた生活時間の割合で示してある。4つの型は1軸と2軸のサンプルスコアの符号で分けてあり、『余暇』の時間の長短を分ける3軸の分類はなされていないため『余暇』の時間は型による差はなかった。しかし、生活必需行動と『余暇』を含めた5つのクラスターの生活時間全体と比較すると4つの型の生活時間の比率には有意差があった(χ^2 -検定： $p < 0.01$)。

図3によって型別に生活時間の特徴を見ると、Type Iは『労働』が1日生活時間の30%を超え、『家庭』の時間は10%程度あるものの、『勉学』と『社会』の時間が著しく抑えられた型

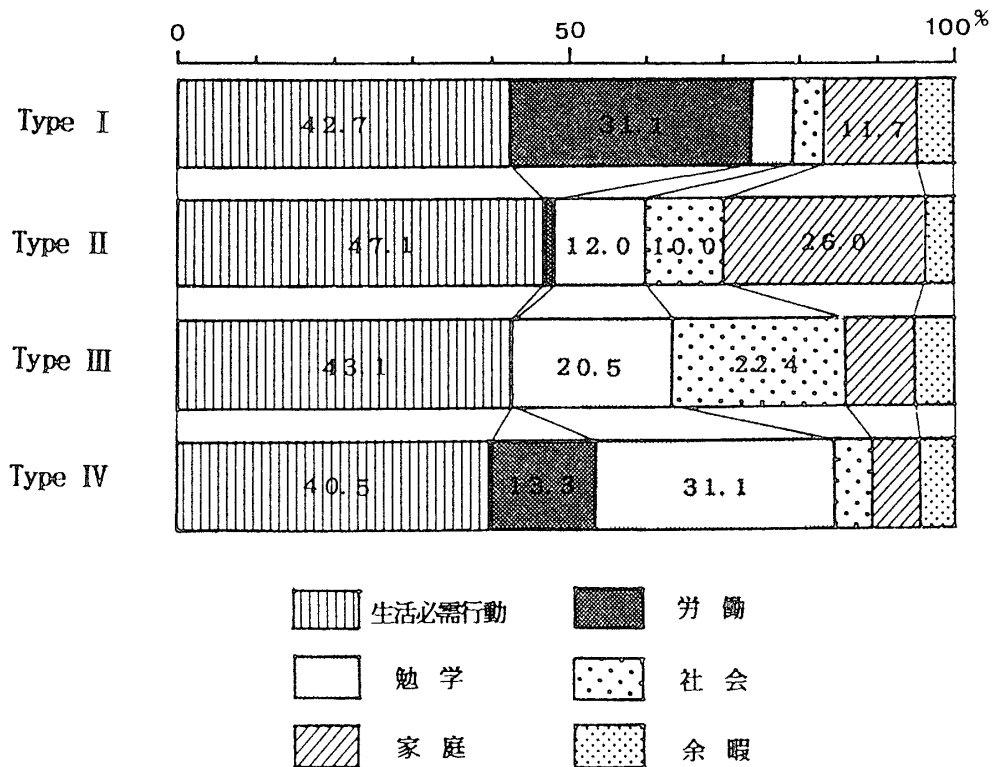


図3 型別にみた1日生活時間

であることがわかる。次にType IIには『勉学』と『社会』の時間が若干含まれてはいるがこの型の特徴は他の型と較べて生活必需行動の時間がやや長いことと『家庭』の時間がどの群よりも長く25%を超えていることである。Type IIIの特徴は『労働』の時間がなくて『社会』の時間が長いことである。また、この型は『勉学』の時間も1日生活時間の20%程度あり、『家庭』の時間も10%には達しないものの若干は含まれている点も特徴となっている。Type IVは生活必需行動の時間が最も短く『勉学』の時間が最も長い点が特徴である。この型では『勉学』の時間が1日生活時間の30%余りを占め、10%を超える『労働』の時間もあるので、生活必需行動の他に『社会』や『家庭』の生活時間もかなり圧縮されたものとなっている。

考 察

1. 生活行動項目の分類について

生活時間の研究は労働科学の分野でその歴史は長く(沼尻³⁾、その研究成果が労働環境の改善や労働条件の向上に資してきた意義は大きい。一方、家政学の分野でも家庭経営・管理学の領域において主婦の家事労働の評価や生活改善を目的として調査的研究が積み上げられ、調査の方法についても検討されてきた(伊藤他¹⁾。それとは別にNHK²⁾もラジオ、テレビの視聴者の動向を探るために長年にわたって大規模な国民生活時間調査を行っている。しかし、このNHKの調査のような幅広い年齢層を対象にした大規模調査を別にすれば、勤労者や主婦を対象とした労働科学や家政学分野の生活時間研究では対象の生活行動に一定の型があるためか生活行動項目自体があらかじめ対象とする人々の生活様式にあわせて分類されていることが多く(大森⁴⁾、それらの分類法では勤労者でもなく主婦でもないような人々の生活時間の構造はとらえきれないという問題があった。

はじめにも記したように『モラトリアム人間』とも呼ばれる現代の大学生は勤労者になることも主婦になることも猶予され、自由な時間を享受しながら豊かな社会で暮らしている若者集団と考えられている。しかし、このような若者たちとは別に「毎日が日曜日」と語る定年退職者のような高齢者の集団もわが国では高齢化社会へ向かう歩みにともなうて今後はますます増えて行くと考えられる。さらに、フレックスタイムや在宅勤務のように勤務形態に様々なヴァリエーションが生まれつつある現状を考えると今まで用いられてきた生活時間の分類法だけでは対応できないライフスタイルをもつ人々がますます増えて行くと考えられる。したがって今後は様々な暮らし方を把握できるような生活時間研究の方法をみ出すことが必要になってくるといってよいであろう。

本研究が女子大学生の生活行動項目を集計するのにあたってNHK²⁾の生活行動分類表を参考にしたのはこの調査が幅広い年齢層を対象としているために分類法が特定の対象にだけ当てはまるものではないからである。しかし、本研究では生活時間調査票の分析を行うにあたってNHK²⁾の分類法をそのまま用いたのではなく、はじめに生活行動項目を生起頻度によって3つに分類した。すなわち、すべての事例に記載されていた行動項目を「生活必需行動」とし、生起頻度が5%に達しなかった行動項目を「その他」にまとめた他は個々の生活行動項目をすべて取り上げた。次に、「その他」を1項目として含む21の「一般的行動項目」を客観的に分類することを試みた。分類にはクラスター分析を用いたが、この分析法を用いた理由は生活時間の類似度によって行動項目を分類するのが研究の目的上最もふさわしいからである。分析の結果、21の行動項目は『労働』、『勉学』、『社会』、『家庭』、『余暇』の5つのクラスターに分類された。大学生であるからにはその生活行動に勉学が含まれるのは当然であるにしても、通学や通勤以外の移動を表す「移動」やウインドウショッピング、旅行中の散策も含む「散歩」の他「スポーツ」や「会話・電話」のようなコミュニケーションの行動が『社会』という社会的、文化的行動の集まりとも見なせる1つのクラスターを形成していた。これは大学生の夏休み前後の生活時間であるがゆえに見られる特徴といえるであろう。

2. 生活時間の型について

女子大学生の一般的生活行動項目が5つのクラスターに分類されたので、次に、それぞれのクラスターの生活時間を{有, 無}または{長, 短}のように2分し、10のカテゴリーに分けて、数量化3類の方法をあてはめ、この10個のカテゴリーと328のサンプル(164人のそれぞれ2日分の1日生活時間)の両方を分類することを試みた。数量化3類を用いたのはこの方法がカテゴリーだけではなく、サンプルも同時に分類できるからである。分析の結果、カテゴリーが『労働』の有無と『社会』の長短によってまず2分され、次に『勉学』と『家庭』の長短、その後で『余暇』の長短によって分けられることが分かった。サンプルに関しては、『余暇』の長短という点を無視すれば、(A)『労働』と『社会』の有無または長短、および、(B)『勉学』と『家庭』の長短、の組み合わせから4つの型に分類することが出来る。しかし、この分類は「一般的生活行動項目」から作られた5つのクラスターに基づいて行っているため、「生活必需行動」まで含めたトータルな生活時間の構造は分からない。そこで、各型別の1日生活時間を調べてみた。

3. 型別に見た生活時間について

生活時間の4つの型、Type I, Type II, Type III, Type IVがそれぞれ『労働型』、『家庭型』、『社会型』、『勉学型』であることはサンプルスコアの符号から推定できるが、実際に型別に生

活時間を集計した結果でもそれは明確に表れていた。『余暇』のクラスターを長短に分ける成分3のサンプルスコアの符号は無視したので図3ではどの型の『余暇』の時間もほぼ同程度である。他に各型に共通しているのは「生活必需行動」に関して1日生活時間の40%以下という型はなく、さらにその内訳を表4の項目別時間数で見ると、睡眠時間に関しては「生活必需行動」が最も短いTypeⅣの『勉学型』で約7時間、「生活必需行動」が最も長いTypeⅡの『家庭型』では8時間30分となっていて、夏休み頃の学生生活ではどの型でも生理的生活時間とも呼ばれる生活必需行動を切り詰めるような事態はおきていないようである。学生生活にはこのようなゆとりとも考えられる一面があるとはいえ、型別に生活時間を見るとTypeⅠの『労働型』では多くの時間が仕事と通勤にあてられ、勉学や社会的行動に振り向けられる時間はわずかなものとなっている。同様にTypeⅣの『勉学型』は1日生活時間の半分近くが勉学(31.1%)と労働(13.3%)で占められていて社会的行動や家庭生活時間はわずかなものとなっている。この2つの型に属する事例は128例で全体の40%弱ではあるが、夏休みやその前後に『労働型』のような勤労者の生活を送っている例や、『勉学型』のようにその平均生活時間で見る限り勉学と労働を両立させている例をみると現代学生を『モラトリアム人間』と総称することには問題があるように思われる。一方、TypeⅡの『家庭型』は夏休みであるために在宅してこのような型の生活時間をもったと考えられる。しかし『家庭型』とはいっても主婦の生活時間(大竹他⁵⁾)とは異なり、勉学や社会の行動に振り向けられる時間がそれぞれ10%程度あって、女子大学生の場合は家庭における生活にも多様性が見られた。またTypeⅢの『社会型』は労働の時間がなく、家庭の時間が10%弱、勉学の時間が約20%ある他に勉学よりもやや多い時間(22%)が『社会』の行動、すなわちスポーツや散歩、通勤通学以外の移動、会話や電話にあてられており、大学生ならではの活動やコミュニケーションが生活の中に組み込まれていることが分かる。このTypeⅡの『家庭型』とTypeⅢの『社会型』は事例数も多いので(『家庭型』110例、33.5%、『社会型』90例、27.4%)、現代の大学生の生活時間を代表する型のようにも見えるが、事例数が多いのは調査時期が夏休みを挟む時期であったためであろう。

ま と め

学生生活が最も多様なかたちをとる夏休みとその前後の時期において女子大学生の生活行動と生活時間がどのように構成されているかを明らかにするために本学を含む3つの女子大学の1年生から3年生までの学生164名の生活時間を調査し、各自が任意に選んだ2日について記入した328例の生活時間調査票を資料として統計的分析を行った。結果を要約すると次のとおりである：

1. 生活時間調査票に記載されていた生活行動項目28を各行動の生起頻度によって分けると、全事例に生起が認められ、「生活必需行動」と見なせる3項目(睡眠、食事、身の回り)の他、一般的な生活行動20項目、「その他」にまとめた稀に見られる行動5項目とに分けられた。
2. 一般的な生活行動20項目と「その他」を合わせた21項目の「一般的生活行動」の生活時間にクラスター分析を適用した結果、21の一般的生活行動項目は『労働』、『勉学』、『社会』、『家庭』、『余暇』の5つのクラスターに分類された。
3. 5つのクラスターの生活時間を有無または長短によって2分してカテゴリーデータに変換し、数量化3類の方法を適用して生活時間のカテゴリーと328の事例からなるサンプルの分類を試みた結果女子大学生の生活時間は4つの型に分けられた。
4. 生活時間の4つの型は(Ⅰ)労働時間の長い『労働型』、(Ⅱ)勉学の時間が短く、家庭生活時

間の長い『家庭型』, (Ⅲ)適度な勉学と社会的行動から成る『社会型』, および, (Ⅳ)ある程度の労働と長い勉学時間をもつ『勉学型』であった.

文 献

- 1) 伊藤セツ, 天野寛子, 森ます美, 大竹美登利: 都市勤労者夫妻の生活時間・生活行動 (第1報) —生活時間調査の方法について—, 家政学雑誌, **34**, 411-420 (1983)
- 2) N H K 放送文化調査研究所: 国民生活時間調査, 1990年度 全国時間量編, pp.6-21, 日本放送出版協会 (1991)
- 3) 沼尻幸吉: 活動のエネルギー代謝, pp.117-164 労働科学研究所 (1982)
- 4) 大森和子: 改訂新版 家庭管理学, pp.41-66 朝倉書店 (1981)
- 5) 大竹美登利, 伊藤セツ, 他: 大都市ニュータウン在住の雇用労働者夫妻の生活時間と生活様式 (第2報) 生活時間の全般的分析, 日本家政学会誌, **38**, 911-921 (1987)